

家族

松江市立美保関中学校 三年 宮崎慎之介

家族とはどういうものなのか。人によってその答えは様々でしょう。私にとっては「みんなで助け合える大切な存在」であるといえます。そう考えるきっかけになったのは、父の存在です。

もともとは、父、母、私、弟の四人で関東で生活をしていましたが、子供を育てるには環境がいいところで、と考えた両親は、母の両親のいる美保関で生活すると決め、四人で引っ越してきました。父はそれまでしていた仕事をやめ、介護の職場に就職し、祖父や祖母も含めた新しい生活を始めたのです。

それから数年後、私がまだ五歳のときに、父は「多系統萎縮症」という病気であると診断されました。この病気はまだ画期的な治療法がない、国が指定する難病です。そのことを知ったときの父は真っ先に母のことを考えたと思います。父はいつも他人を優先していました。

しばらくは父も美保関の家と一緒に生活していましたが、少しずつ病気が進行し、医療的なケアが必要になることが多くなってきたので、仕事をやめ、入院しました。その後、父が勤めていた介護の職場の勧めで、重度障がい者のホームに入ることになります。

父はそこで、入居者としてだけではなく、そのホームを運営する会社の経営企画室の一員として宣伝広報の仕事を始めました。入居者を募集するために広告を作ったり、ブログを書いたりするのです。他にもスタッフ募集のためにハローワークに行ったり、企業説明会で話をしたりしていたそうです。そして、時には講演会の講師をしたり、ラジオにも出演したりしていました。私が聞いた時には、「体が不自由でも、どれだけ重い障がいがあっても誰かの役に立てる」と言っていました。確かに、父は重い病気でありながらも、自分にできる仕事をすることで経済的に家族を支えてくれていました。私は、病気の父が仕事をしている、という事実を目の当たりにして、単純にすごいと思いました。自分は体調が悪いと学校を休んだりするのに、それよりも重い病気を抱えている父が仕事に向かっているのですから。そんな父の姿から、心身に不自由があっても何もできないと差別をしないことが大切で、それが障がいのある人にとってうれしいことなのだとということを学びました。

そうやって頑張る父のことを知っていたせいか、その頃の私は、家に父がいないことや難病であることについて実感がわいていませんでした。コロナのために、なかなか自由に会いに行けなかったことも重なりましたが、「まだ大丈夫だ」という何の根拠もない言葉で自分をごまかして、お見舞いもそこそこにしていました。父は寂しかったらと思う。それでも父は、私がたまに会いに行くと笑顔で迎えてくれました。本当は体も心もつらいはずなのに。トランプをして遊んでくれたり、花火を一緒に見たり、BBQパーティに呼んでもらったこともあります。そして帰り際には必ず「お母さんを頼んだよ」と言ってくれました。私は正直なんて答えたらいいかわかりませんでした。私は自分がいることで母を幸せにで

きている自信がありませんでした。

直接父に会えたのは、昨年の六月が最後でした。八月には、見舞いに行っていた母がテレビ電話をつないでくれましたが、その時には父が何を言っているのかよくわからなくなっていました。そして父は十一月に亡くなりました。父が、身近な人がいなくなってしまうなんて考えたことはありませんでした。とても気分が落ち込んだし、時には体調も思うようにならないこともありました。今でもまだ、父の死を受け止めきれない自分を感じることがあります。しかし、このことをきっかけに、私は変わろうと決めました。

私は何より「父もっと会えばよかった」と、とても後悔しました。「もうこんな後悔はしたくない」と思った私は、後悔しないように自分にできることは精一杯しようと思い、自分がすべきことは何だろうと考えました。まず、父も好きだった野球です。中三になった私にとって、部活動の最後の締めくくりとなる市総体に向けて、できる限り練習に取り組みました。結果としては負けて次に進めず悔しい思いもしましたが、仲間とともに全力でがんばれたので後悔はありません。

家では、祖父も祖母も年を取って体が動きにくくなってきました。知的障がいがある弟は大変なところもあるけれど、それ以上にかわいく、一緒にいて楽しいです。父が「体が不自由でも、どれだけ重い障がいがあっても誰かの役に立てる」と言ったように、家族一人一人が、かけがえのない大切な存在です。私も家事を全部母に背負わせないように、自分でできるものはするようにしています。これからも家族みんなでお互いをサポートし合いながら笑顔で協力していきたいと思います。きっとそれが父の願いであるから。